群馬県現代俳句協会会報

No. 67

2022年
1月10日発行

第二十九回群馬県俳句協会大賞

大賞作品

「匹夫なれども」

本田　巖

三寒に耐へ惚けずに四温待つ
もう少し畑で生きたし寒九の雨
反骨の農夫三代虎落笛
初夢に力貰ゐて鍬を持つ
啓蟄や田に遊びゐて八十年
鎌止めて畔に腰かけ初音聴く
鍬を持ち朧の月を背に負ふて
かかさまは姉さん被り初蕨
春祭太鼓の桴は鍬胼胝で
鍬を持つわが生業や田水張る
友逝きて梅雨の重さの骨拾ふ
荒鋤の土塊見てゐる麦藁帽
夕焼を鍬に乗せゆき帰宅せり
老鶯や俺もお前もまだ啼ける
百姓は泥手で汗を拭きをりし
藍浴衣着たれば遺影の父に似て
芋嵐厨にありし火伏札
牛の背を撫でてをりたる秋袷
われ畑に鳥は塒へ秋の暮
産土に声を零して雁の棹

受賞の言葉

本田　巖

第二十九回群馬県現代俳句協会大賞のお知らせを頂き大変嬉しく有難く思っております。正に青天の霹靂の心境です。

呑兵衛仲間の先輩から酒ばかり飲んでいないで、一緒に俳句でもやらんか、と言われ俳句を始めました。

俳句を通じて多くの方々との素晴らしい出会いがありまし

た。俳句の楽しさを教えて下さった先生、俳句の奥深さを教えて下さった先生、そして俳句を愛する先輩との出会いは私の背筋を伸ばしてくれております。平成二十六年には山蘆での飯田秀實氏と花や植物の語らい、そして渋谷道氏との出会いがありました。

俳句は魔物です。俳句に魅せられて十余年、先の見えない樹海もよき師のお陰で少しずつ光が差し込んでいるようです。自分の目で、言葉で、俳句を作る努力を続けていきたいものです。全てのご縁を大事に生きて参ります。

俳句よ、本当にありがとう。

最後になりましたが、選考の労をお取り下さいました先生方に心より感謝し、お礼を申し上げます。

選後評・選考結果

第二十九回群馬県現代俳句協会大賞は厳正な選考の結果、前橋市在住の本田巌氏に決定いたしました。応募総数四編の各選考委員の選後評、選考結果は次のとおりです。

中里麦外

今回の応募作品は四編と少ない。しかし、力作が揃った。「匹夫なれども」「墓洗ふ」を推した。

「匹夫なれども」は、日々の生活と人生が高いレベルで作品化されている。

三寒に耐へ惚けずに四温待つ
啓蟄や田に遊びゐて八十年
われ畑に鳥は塒へ秋の暮

「墓洗ふ」は、身内との心の交流が思い深くうたわれた作品が多い。

叱り育てし子に労られ桜餅
父あがめ母をたたへる秋彼岸

「英雄」は、詩眼の確かさとその表現力に注目した。

葉桜や本は帯より古びたり
クリスマスただならぬ世を灯すべし

「成行き」は、さりげなくうたわれた作品が捨てがたい。

成行きにまかす明け暮れ草の花

次回は、より多くの意欲作が登場することを期待したいと思う。

安冨耕二

俳句大賞選考の知らせが来ると今年も僅かになったと感じるが、本年はよいことも少なく気分が沈んでしまう。そんな中で「匹夫なれども」には積極的に生きようとする意欲を感じさせる句があって、ほっとした。

もう少し畑で生きたし寒九の雨
啓蟄や田に遊びゐて八十年
鍬を持ち朧の月を背に負ふて

「墓洗ふ」は思い出に耽けている様子が句より分る。

子の墓を洗ふ夫の背終始無言
蚊帳を吊る子の思ひ出に浸りたく
炉開きや帯にしのばす子の遺影

「英雄」には措辞の好きな句がある。

喚声のはみ出してゐる花筵
姿見に十一月のわたしかな
八月の空を掴めぬ両手かな

「成行き」は白鷺のふわりと下りて田に紛れの句がよかった。

原田要三

「墓洗ふ」は、若くして亡くなったお子さんに対する親の思いを底流に、日常の季節の移り変わりをさりげなく詠んでいて共感した。

叱り育てし子に労られ桜餅
子の墓を洗ふ夫の背終始無言
牛蒡呉るる野良着の膝に泥つけて

「叱り育てし」の句は、厳格な教育方針とその子供から優しく労られる様子に、家庭内の躾の成功例として印象に残った。

「英雄」は、やや観念先行の句が気になる中で、仮名遣いなどに細心の注意をしながら諷詠されている点に魅かれた。

喚声のはみ出してゐる花筵
つまづけば膝の寂しくなる寒露

以下、「匹夫なれども」「成行き」には誤字と仮名遣いに気になる箇所があった。注意して句稿を清書して欲しい。

次回は多くの方の応募を期待します。

堀越胡流

四編でしたが力作揃いで悩みながら熟考した。一位に「匹夫なれども」を選んだ。

反骨の農夫三代虎落笛
啓蟄や田に遊びゐて八十年
われ畑に鳥は塒へ秋の暮

農業というテーマで生活を楽しんでいる。故に衒いのない自然体に魅せられた。

「英雄」の
魂のはぐれてをりし冬の蝶
クリスマスただならぬ世を灯すべし

などの混沌としたところに惹かれた。

「墓洗ふ」
叱り育てし子に労られ桜餅
父あがめ母をたたへる秋彼岸

身内を詠ったぬくもりを感じた。

「成行き」
鉄線やあれこれそれの日常語
一枚の紙に戻れぬ鶴渡る

発想の面白さや普段の生活詠に納得した。

今井妙

群馬県現代俳句協会大賞というには四編。コロナ禍の影響でしょうか。

一位に「墓洗ふ」を選しました。心惹かれる句を挙げます。

猛暑日を労りあひて老いふたり
苦労せし顔ばかり寄り敬老日
みな母につながる話十三夜
私の父は戦死でした。気丈な母に育てられた私達でした。子供の頃の思い出と一貫して心打たれました。

二位に「匹夫なれども」を選しました。

反骨の農夫三代虎落笛
老鶯や俺もお前もまだ啼ける
力の籠った俳句で気力をいただきました。

三位に「英雄」を選しました。

葉桜や本は帯より古びたり
そうかと頷きながら本棚を見直しました。

四位に「成行き」を選しました。

凜然と今朝の日輪建国日
季語に対して「凜然」が効果的です。

第29回群馬県現代俳句協会大賞得点一覧表

No.	タイトル	中里	安冨	原田	掘越	今井	合計
1	成り行き	2点	2点	2点	2点	2点	10点
2	匹夫なれども	5点	5点	3点	5点	4点	22点
3	墓洗ふ	4点	4点	5点	3点	5点	21点
4	英雄	3点	3点	4点	4点	3点	17点

※1位5点、2位4点、3位3点、4位2点、5位1点

第三十回群馬県現代俳句協会大賞応募要項

応募内容　作品二十句（未発表）
　　二百字詰原稿用紙を使用　枠外に題名記入
　　別紙に題名・姓号・住所・電話
参加資格　群馬県現代俳句協会員（会費納入者）
参加費　二千円（現金書留または郵便為替）
締め切り　令和四年九月三十日（金）必着
選考委員　中里麦外　安冨耕二　原田要三
　　堀越胡流　今井妙
賞　大賞一名（賞状及び三万円）
　　準賞若干名（賞状及び一万円）
作品送付　堀越胡流方　群馬県現代俳句協会大賞係

第七回紙上俳句大会

令和三年八月三十一日を締切とする夏の紙上俳句大会には五十四名の会員、会員外から百八十句の投句が寄せられました。特別選者には特選三句、入選十二句を、その他参加者には特選一句、入選五句を選句、入賞者には賞品が贈られました。

入賞句

捨てきれぬ過去をひろげて土用干し　大沢友江
噺家のゆるりとぬぎぬ夏羽織　石井紅楓
連れ帰る亡父の野良着の案山子かな　二本松よし子
とんぼうの群るる高さに風の道　田中恵子
夏帯や野心もたねば屍に　牧野美知子
敗戦忌電話の歩く世を生きて　高橋正彦
夫という不思議な他人しゃぼん玉　河合秀美
宝物仕舞うしぐさの袋掛　真鍋俊男
扇風機からだが横になりたがる　石原玲子
胃の機嫌先づうかがへり冷奴　原田要三
蝸牛一病背負ひ生きむとす　茂木房子
そつと来てそつと戻りぬ帰省の子　水村幸雄
墓洗ふ幾つかのこと子に伝へ　田中恵子
無条件降伏読むたび夏が新しい　斎藤一平
父母のせて夫の馬来る迎え盆　小林けさ子
秋晴れやこんなところで妻に会う　堀越胡流
惜しみなき沙羅の散華や師の忌くる　鈴木照江
補聴器を外し涼しき夜なりけり　鈴木照江
八月の後ろ姿を見てしまふ　石原百合子
どんぐりや五百羅漢にある温み　保泉初音

みんなの広場

天地の怪しき仕業花吹雪
梅雨深し言葉探して辞書の中
田植機の廻り小昼の三、四人

白井しげみ

老木に喝采のごと梅の花
筍掘るゆらぐ大地の息づかひ
パワー全開両手を使ひ草を引く

横田真智子

瀬音澄み風のかすかに道祖神
植田いま安堵の水の満ち溢れ
さざ波の湖面煌めく若葉風

保泉初音

詩にひそむブラックホール小夜時雨
その胸の痛みは幸か冬さくら
蹴上りの上手に出来て冬銀河

二本松よし子

五月雨やあなたに逢えて丸くなる
虫の音を育てています庭の闇
共に生く夫の寝息のあたたかし

高田多加江

垣越しに遊びに来たる烏うり
長き夜や子の書棚より智恵子抄
どんぐりも一緒に洗う洗濯機

大島知子

生死この九十年の晩夏かな
三日月は舟か棺か揺りかごか
杖もまた吾が一脚や花野まで

斎藤盈世

蛇笏忌や後山の空は星を飼ふ
芋植うる阿毘羅吽欠唱へつつ
菊薫りたる戒名の追加彫り

本田巌

転勤はデラシネを生む麦青し
塩の道行く手ゆくてにある緑陰
「この餓鬼」と追はれし日あり柿の秋

原田要三

からすうりうからはらから風にゆれ
空沢橋柿平橋と時雨けり
かの壺に挿せと侘助頂戴す

朝倉裕子

少年帰らず花野の一番星
手のひらの古里に置く柿明かり
負けるつてなんだか素敵草の花

河合秀美

秋の吟行会開催

コロナ下火をぬって

群馬県現代俳句協会主催の第二十六回、秋の恒例行事吟行会が令和三年十月十七日（日）、前橋市・臨江閣、幸の池を会場に開催されました。

当日は協会員二十三名が参加、国指定重要文化財の臨江閣と美しい庭園を散策するなどコロナ緊急事態宣言解除下の秋の一日を吟行に、語らいに会員相互の繋がりを深めました。

入賞句

竹林の一叢を研ぐ秋の風　石井紅楓
石蕗の花座せば楫取の聲かすか　清水里子
石蕗は黄に一閣いまも江に臨む　中里麦外
行く秋や百年こえし松の瘤　大島知子
小流れのやがてさざなみ石蕗の花　河合秀美
いにしえの和の静けさや秋気澄む　保泉初音
朔太郎の婚の館や秋灯　田中裕子
築山の疎水緩みて石蕗の花　野村征三郎
秋冷や臨江閣の長廊下　原田要三

一句抄

水辺には水辺のくらさ秋寒し　本田巌
秋色の遠山を背に楫取像　三島梅子
大利根の身に入む音となりにけり　堀越胡流
臨江閣水音に沿ひ庭巡る　久米桂子
雨やみて萩の一叢風抱く　秋元倶子
朔太郎歩いた道か暮の秋　佐藤愛子
庭古りて臨江閣の秋深し　野村紘一
石蕗の花念々の石鎮もれり　石原玲子
古屋敷に縁の下あり秋時雨　朝倉裕子
庭石の雨に黒ぐろ石蕗の花　橋本雅子
つわぶきの黄のまばゆかり臨江閣　野崎高子
山口県の萩の花咲く臨江閣　下城雅子
吟行や上着手にする秋の朝　柴崎光昭
空っぽのバス通り過ぐ秋の雨　沼田恵子

第七回研修句会

絵ろうそく灯す母の忌秋時雨　秋元倶子
枯れ急かす風の木に吹き人に吹き　朝倉裕子
長き夜の看取りの仮眠きれぎれに　石井紅楓
秋深しボールペンにも癖のあり　石原玲子
亡き人に頬杖をつく良夜かな　河合秀美
おろしたての靴の違和感草紅葉　久米桂子
いつの間に一組なりし干布団　佐藤愛子
雲南の石壁仏秋の風　下城雅子
晩秋や木槌せわしく鳴りひびく　高田多加江
刈田ゆく何か失い何か得て　中里麦外
式部の実小粒なれども清楚なり　野村征三郎
佳き便り届くポストや菊日和　保泉初音
投函後誤字に気付きし文化の日　堀越胡流
次の世もこの母の子で夕紅葉　松島啓子
下校児のくしゃみひとつに赤面す　真鍋俊男

（令和三年十一月三日）

シリーズ

私の一句

二月の町に拾ふ雲形定規かな

水野真由美

物語や詩を読むと自分なりに何かを感じ取る。それが何なのか、なぜそう感じるのかを知りたかった。学生時代の「読むとはどういうことだろう」という授業で、その答えは必ず作品の中にあると知った。俳句と出会い、こんなに短い象徴詩をどうやって読むのだろうと不思議だった。金子兜太の講座では作品に即した言葉で俳句の読み方を具体的に教えられた気がする。どうやら書くとは自分の作品を最初の読者として読み、もっと良くなる可能性があるかどうか、あるとすれば、どこにあるのかを考えることらしい。読めれば書けるようになるのではないか。

ごくたまに「あ、書けた」と思えることがある。「二月」の硬質で明るい光の中、何でもない場所で何かを拾いたくて「雲形定規」を見つけた。うれしかったのは「読めた」からだろう。

梅雨明けの少女ら果実の顔もてり

白井しげみ

俳句を始めて二、三年経った頃でしょうか。十五人程の句会で殆どの人達が選んでくれたのです。勿論、リーダーの足利屋さんも選んでくれました。

部活の女子達が生き生きとバレーボールをしていたのです。上気した顔は挽ぎたての桃のように瑞々しく、初毛まで光っていました。私の直感で若い生命をそのままに詠んだだけなのですが、「感じたままを素直に表現すればいいのだ」と思った瞬間でした。

若気の至り、いい気になって何十年が過ぎました。自宅での句会は多い時は年間五十回開いていました。コロナ禍で令和三年三月二日を以って休会中です。

次回は千七百五十回、大きな節目を迎えたいものです。

児の手術待つ病廊のそぞろ寒

石井紅楓

長女が八歳の時、難聴を疑い、すぐ群大病院耳鼻科で検査をして頂いた。結果はアデノイド（増殖性扁桃肥大症）、このままだと聴覚が低下し耳が全く聞こえなくなる可能性があるとの診断にすぐ入院し手術することになった。生後五か月の長男を背負い病院の廊下を行ったり来たり、不安と病廊の何とも言えぬ寒さ、手術を待つ時間の何と長く感じたことか。夜の付き添いも乳飲み子とくも膜下出血で寝たきりの姑を夫に任すことが出来ず看取れなかった。さぞかし一人で過ごす夜は不安で寂しかったろうと、今でも思い出すと涙が出る。掲句は主人の脳腫瘍の手術日が決まった日（三十年前）何故か娘の手術が思い出され作句した。そして師・未灰より特選を頂いたが、これは、頑張れと励ます師の優しい心遣いだと受け止めている。師と共に私にとって忘れられない一句となった。

追悼

吉岡好江

昭和十四年三月一日群馬県生。渋川氏北橘町に居住。「やまびこ」主宰吉田未灰に師事。平成二十八年「やまびこ」廃刊後、佐怒賀正美主宰「秋」同人。句集に「橘の里」「風の道」。平成十八年、県文学賞受賞。群馬県現代俳句協会副会長。

花は葉におだやかに齢重ね合ふ
白もまた炎のいろとなる寒牡丹
逆縁の送火揺るるまで無言

令和三年十一月五日没。享年八十二。（原田要三）

新会員紹介

柴崎光昭　名和俳句会

お年玉兄と違ふと目の言ひて
柱きず遠き五月の宝物
年の瀬や捨てかねてゐる桐箪笥

久保田桂子

少しずつ生削りをり秋の雨
朽ちてゆく哀しみ一つ冬の朝
差し色に朱を使ひたり冬入りぬ

◆令和四年度行事予定

○群馬県現代俳句協会総会・俳句大会
四月十日（日）サンダーソンホテル

○夏の紙上俳句大会

○吟行句会

○研修句会

○群馬県現代俳句協会大賞募集
募集締切日が九月三十日に変更になりました

行事予定の詳細は会報、別紙参照

◆会費納入のお願い

群馬県現代俳句協会の年会費（千円）未納の方は、会計担当幹事まで送金願います。

なお、会計年度は、一月から十二月までです。

また、令和四年度より会計担当幹事を保泉初音さんにお願いすることになりました。

【問合せ先】　保泉初音宛

【振込先】　群馬県現代俳句協会
郵便振替口座　00200-5-886603

群馬県現代俳句協会会報第六十七号
発行日　令和四年（二〇二二年）一月十日
発行人　原田要三
編集者　河合秀美